

高校生の文学的英語能力に関する実証的研究

広島大学大学院教育学研究科 瀨口 脩
広島大学大学院教育学研究科 中村 愛人
広島大学大学院教育学研究科 小野 章
広島大学大学院教育学研究科 小篠 敏明
広島大学大学院教育学研究科 院 生 西原 貴之

実用主義的色合いが強まった英語教育では、文学不用論がしばしば議論され、英語教科書にも文学教材はあまり見られない。しかし、この状況の良し悪しを判断するための実証的な証拠がない。このことを考えていくためには文学的英語能力と一般的な英語能力それぞれの構造、両者の違いや関係が示される必要がある。その第1段階として、本研究では独自に作成した文学的英語能力テストと一般的英語能力の目安と考えられるセンター試験のスコアをそれぞれ従属変数として重回帰分析を行い、共通の独立変数（英語語彙レベルテスト、英語産出語彙テスト、英語文法テスト、現代国語テスト、動機強度アンケートのスコア）による決定係数（ R^2 ）を比較する。分析の結果、 R^2 間に違いが見られ、2つの従属変数の構造の違いの可能性が示唆された。 R^2 と変数間の相関係数（ r ）をもとに考察を行い、文学教材の有用性を考察するための実証的証拠の1つを提示する。

キーワード：文学的英語能力テスト、センター試験、文学教材の有用性、文学的英語能力の構造、一般的英語能力の構造

1. 研究の背景

国際化が急速に進む今日、国と国を越えて、そして言語と言語を超えてコミュニケーションを行うことが必要不可欠となっている。このようななかで英語教育は、英語でコミュニケーションができるように学習者を育てること、つまり英語を実際の場で使えるように彼らを導くことが求められている。現行の学習指導要領でも、英語学習者に実践的コミュニケーション能力を身につけさせることをその目標としている。英語教育は、実用主義的特徴を強めてきていると言えよう。

このように、外国語教育が実用主義的色合いを強く帯び始めると、文学教材は周辺に追いやられがちである（Davis, 1989）。実際、英語教育における文学教材の活用を主張すると、現在の英語教育には文学教材は相応しくないのではないかという反論がなされることも少なくない。

この状況を多かれ少なかれ反映してか、現在高校で使われている英語教科書を見ると、文学教材があまり取り上げられていない。教師は主に教科書に基づいて日々の英語の授業を組み立てる。教科書に見られるこの状況に関して疑問を抱いたまま、授業をしている教師も少なからずいることであろう。

しかし、現在の英語教育における文学教材の有効性をめぐる議論や教科書の状況は、何らかの実証的なデータに基づいたものではない。実証的な証拠を欠いたまま、議論が空回りしたり、表面的な感覚だけで文学教材を英語の授業から排除するという状況が生じてしまっている。

このような状況を打破し、英語教育における文学教材の位置づけをより厳密に議論していくには、あらかじめ英語教育の現場を反映したデータに基づき、文学を英語で読む能力の構造、それと普通に言われている英語能力の構造、両者の違い

や関係が明らかにされなければならない。

文学を英語で読む能力をここでは文学的英語能力と呼ぶ。本研究では、英語教育の中でも、特に日本の高等学校における英語教育のことを考えているので、日本人高校生の英語学習者が英語で書かれた文学作品を読むという状況を中心に据えて議論を進める。

2. 先行研究

文学的英語能力に関連した議論は、文学理論の中に見出すことができる。Culler (1975) は、Chomsky (1965) が生成文法において提案した、理想的な話者と聞き手が持っている想定された言語能力 (competence) をモデルとして文学能力 (literary competence) を提案した。これは理想的な文学読者が持っている想定される、文学を読み解くための能力を意味する概念である。Culler (1975) はこの能力は言語的な側面と同時に文化などが関係する言語外的な要因が関わっていると考えたが、実際にどの程度関わっているのかということについては実証的な証拠をもとに議論を行っていない。

Culler (1975) 以来、文学理論において文学能力の構造を明らかにしようとして、理論的な研究 (e.g., Schaubert and Spolsky, 1986) や実証的な研究 (e.g., Hoffstaedter, 1987) がなされてきているが、未だその構造は明らかになっていない。また、一般的な言語能力との関係についても明らかになっていない。

外国語教育研究においても Brumfit and Carter (1986) や Isenberg (1990) が、文学能力について考察しているが、その構造や一般的な外国語能力との関係については議論していない。

数少ない先行研究で特筆すべきものとして Fecteau (1999) がある。Fecteau (1999) は英語を第1言語とする上級フランス語学習者を被験者とし、フランス文学を読む能力が、第1言語 (英語) で文学作品を読む能力と、フランス語能力によってどのように説明されるかを調べた。実験結果は、外国語熟達度よりも第1言語で文学を読む能力の方が外国語で文学を読む能力とより密接に関係していたというものであった。Fecteau (1999)

の研究は、外国語で文学を読む能力について実証的に研究をしたという点で価値のあるものであるが、被験者が上級外国語学習者であるということや、一般に英語教育では重要となる語彙力や文法能力との関係が考慮に入れられていないということなどの点で、直接日本の英語教育に応用することは難しい。日本の英語教育において、文学教材の位置づけを議論するためには、この研究とは別に英語教育の現場のデータに基づいて研究を行う必要がある。

3. 研究の目的

文学教材の有効性や英語の授業で文学作品を扱うことへの可否について議論するためには、文学的英語能力と一般に高等学校で養成が目標されている英語能力の構造と、両者の違いや関係が明らかにされなければならない。しかし、前節で示したように先行研究はこのことに関して不十分である。そこで、本研究では、これらのことを調べていく第1段階として、日本人英語学習者の文学的英語能力と一般的な英語能力が、学校現場の教師と学習者にとって比較的身近で直観的に英語能力に関わっていると考えられる要素 (英語語彙レベルテスト、英語産出語彙テスト、英語文法テスト、現代国語テスト、動機強度アンケートのスコア) で、それぞれどの程度説明されるかを調べる。更に、それぞれの説明される度合いを比較検討する。これにより、これらの構造の違いについて今後考えていくための手始めとなるデータを提示することを目指す。なお、文学的英語能力は独自に作成したテスト (後述) により測定した。一般的な英語能力の指標としては、センター試験のスコア (後述) が用いられた。

本研究の研究課題は次の2点である。

- (i) 教師と学習者にとって身近で英語能力に関わっていると直観的に考えられる独立変数によって、文学的英語能力テストのスコアはどの程度説明されるかを試験的に調べる。
- (ii) 共通した独立変数による説明率が文学的英語能力テストとセンター試験ではどの程度異なるかを試験的に調べる。

4. 研究の方法

4.1. 被験者

被験者は、広島県立高等学校3年生190名である。この学校は一般的に考えて学力レベルが高い。

4.2. 実験材料と実験手順

本研究では、重回帰分析を行った。その際、(i)を調査するために文学的英語能力テストのスコアを従属変数とし、英語語彙レベルテスト、英語産出語彙テスト、英語文法テスト、現代国語テスト、動機強度アンケートそれぞれのスコアを独立変数とした。そして(ii)を調べるために、センター試験のスコアを従属変数とし、(i)と同じ5つのテストのスコアを独立変数とした。その後で、共通した独立変数による2つの従属変数の説明される割合を比較した。また、独立変数の投入方法は、本研究が説明率に主たる関心があったため、強制投入法を採用した。以下それぞれの変数について説明を行う。

4.2.1. 従属変数

(1) 文学的英語能力テスト

文学的英語能力は、Robert Frostの“Stopping by Woods on a Snowy Evening”の内容理解に関する問題を解くことで測定された(付録1参照)。このテストは英語教育内容学(英米文学)を担当する教員2人によって作成された。彼らは文学的英語能力に関して、この作品で重要となるポイントを挙げ、2人で相談する形で問題を作成した。テストは100点満点であった。テスト時には学習者は辞書を使うことを許可された。

設定されたテスト問題の解答は、付録2の通りである。部分点は与えられておらず、学習者の解答が、問題作成者の作成した解答の主旨と合致すれば、あらかじめ設定された点数が学習者に与えられ、合致しなければ点数は与えられなかった。

設問は、この作品の解釈に重要となる部分を問うている。したがって、学習者は設定された設問に答えることで、その作品の読みを深めていくことができる。この点で、設定された問題は、単に実験を行うためだけでなく、教育的効果を促すこともねらいとしたものであった。設定された問題

のうち、設問1, 2, 6は音韻に関連した問題である。設問3は文脈と単語の意味の多義性に関連した問題である。設問4と5は抒情詩独特の特性を問う問題である。一見、設問4と5は、単純な文法の問題に見えるが、この部分は主人と馬の自然に対する態度のコントラストを読み取る上で重要な部分であり、学習者の注意をそのコントラストに向けさせるというねらいもあって設定した。設問7と8は、詩の主題に関連した問題である。設問1～6は詩のテキストの一部を問う問題であり、設問7と8はテキスト全体を問う問題となっている。テキスト全体に関して問うているという理由から設問7と8は配点が他の部分と比べて高めに設定されている。設問1～6に関しては、問題作成者がそれぞれの問題の困難度について話し合い、配点が決められた。

また、散文ではなく、今回韻文を取り上げた理由としては、(1)韻文について学校現場ではほとんど扱われておらず、実験校から取り上げてほしいという要請があった、(2)韻文は、文学と呼ばれるテキストの究極的な形態であり、テキスト内に文学的な特徴が豊富に含まれている、(3)詩歌は現実に考えられているほど難しいテキストではないということを学習者に気づかせたかった、(4)韻文はその言語の音韻構造を活用するテキスト形態であり、学習者はテキストを読みながら音声についても意識できるという意味で、英語教育的にも効果的な教材である、という理由による。また、このテキストが選択された理由としては、(1)アメリカ詩を代表する有名な作品である、(2)言語的にそれほど難しくない、(3)aaba/bbcb/ccdc/ddddという脚韻構造が韻文に特徴的な心地よい音韻構造を示している、(4)最終連における脚韻の完成がこの詩全体の詩想の展開と密接に結びつき、詩の形式と内容の融合が見出され、美しさすら感じられる完成度の高い作品である、という理由による。

(2) センター試験

文学的英語能力テストのスコアと比較するものとして、平成14年度大学入試センター試験のスコアが用いられた。センター試験は高等学校の授業に大きな波及効果をもったものであり、また、反対にセンター試験の問題は高等学校における英語

教育の集大成的な特質を備えていると考えられるため、本研究では高等学校で学習者に養成している一般的な英語能力の指標とした。

4.2.2. 独立変数

本研究では、英語教育の現場で教師と学習者にとって身近であり、直観的に英語能力に関係していると考えられるものを選択し、独立変数として使用した。これら共通の独立変数による決定係数をもって、文学的英語能力テストとセンター試験のスコアそれぞれが説明される割合を調べる。

(1) 英語語彙レベルテスト

英語語彙レベルは、Nation (2001) の語彙レベルテスト B (付録 3 参照) を用いて測定した。実験者は、2000語レベル、3000語レベルを測定するための問題の中から、比較的難しいと考えられるものを抽出し、テストで用いた。これは、これら2つの語彙レベルにおいて難しいと考えられる問題が高校生の語彙力を測定するには適切であると、実験者が判断したためである。テストは30問からなり、1問1点で合計30点満点である。

(2) 英語産出語彙テスト

英語産出語彙テストとして、Nation (2001) のプロダクティブレベルテスト (付録 4 参照) を用いた。問題項目は、2000語レベルと3000語レベルの中から、高校生に対して適切と思われる問題を抽出し、テストで用いた。テストは15問からなり、1問1点で合計15点満点である。

(3) 英語文法テスト

英語文法テストとしては、CELT の全75問中、最初の35問を用いた (付録 5 参照)。テストは、1問1点で合計35点満点である。

(4) 現代国語テスト

被験者が通う高等学校において実施された現代

国語の模擬テストの得点が用いられた。テストは100点満点であった。

(5) 動機強度アンケート

動機強度は、アンケートにより調べた (付録 6 参照)。これは、Gardner (1985) の Appendix A.2 の内、オリエンテーションを測定するための項目を除いた20項目を和訳、一部修正して用いた。それぞれの質問項目において、どの選択肢を選んだら何点を与えるかがあらかじめ決まっており、これに基づいて被験者の得点を算出した。これは60点満点である。

5. 結果

各変数の平均、標準偏差、変数間の相関関係 (ピアソンの積率相関係数) は表 1 の通りである。独立変数による文学的英語能力テストスコアの説明率を調べるために行った重回帰分析の結果は表 2 の通りである。独立変数によるセンター試験スコアの説明率を調べるために行った重回帰分析の結果は表 3 の通りである。有意水準はすべて $\alpha = .05$ として分析を行った。

文学的英語能力テストのスコアを従属変数とした重回帰分析 ($R^2 = .19$, $F(5, 184) = 8.87$, $p = .00$) において、独立変数を強制投入法により投入したところ、英語文法テストと英語産出語彙テストの予測力のみが有意であることが示された (表 2 参照)。

センター試験のスコアを従属変数とした重回帰分析 ($R^2 = .58$, $F(5, 184) = 51.16$, $p = .00$) において、独立変数を強制投入法により投入したところ、5つの独立変数すべての予測力が有意であることが示された (表 3 参照)。

表 1 各変数の平均値・標準偏差 (SD), 変数間の相関関係

N=190	平均値	SD	相 関							
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	
①文学的英語能力テスト	38.79	16.63	—							
②センター試験	141.19	28.92	.47	—						
③英語語彙レベルテスト	23.05	4.16	.33	.66	—					
④英語産出語彙テスト	4.65	2.23	.36	.58	.54	—				
⑤英語文法テスト	26.49	5.08	.36	.58	.59	.48	—			
⑥現代国語テスト	61.94	14.68	.20	.32	.10	.27	.16	—		
⑦動機強度アンケート	42.50	6.16	.14	.27	.21	.26	.21	-.05	—	

表2 文学的英語能力テストのスコアを従属変数とした重回帰分析の結果

(モデル集計)					
R	R^2	自由度調整済み R^2	SE	F	p
.44	.19	.17	15.12	8.87	.00
予測値：(定数)、英語文法テスト、英語産出語彙テスト					
(係数)					
独立変数	B	SE	β	t	p
(定数)	-6.25	10.88		-.57	.57
英語語彙レベルテスト	0.40	0.35	.10	1.14	.26
英語産出語彙テスト	1.28	0.63	.17	2.03	.04
現代国語テスト	0.14	0.08	.12	1.71	.09
英語文法テスト	0.63	0.28	.19	2.25	.02
動機強度アンケート	0.12	0.19	.04	0.62	.54

表3 センター試験のスコアを従属変数とした重回帰分析の結果

(モデル集計)					
R	R^2	自由度調整済み R^2	SE	F	p
.76	.58	.57	18.96	51.16	.00
予測値：(定数)、英語語彙レベルテスト、英語産出語彙テスト、現代国語テスト、英語文法テスト、動機強度アンケート					
(係数)					
独立変数	B	SE	β	t	p
(定数)	-2.11	13.64		-.16	.88
英語語彙レベルテスト	2.80	0.44	.40	6.33	.00
英語産出語彙テスト	2.43	0.79	.19	3.08	.00
現代国語テスト	0.40	0.10	.20	4.02	.00
英語文法テスト	1.12	0.35	.20	3.20	.00
動機強度アンケート	0.50	0.24	.11	2.15	.03

しかし、表1に見られるように、独立変数として設定した変数間に相関関係が認められていることから明らかなように、本研究では独立変数間の無相関を仮定することができない。したがって以下の考察においては、標準偏回帰係数 (β 値) の解釈は行わず、すべての独立変数からの予測の総体としての決定係数 (R^2) と変数間の相関係数 (r) についてのみ扱う。なお、説明率については、本研究では設定された独立変数が5つと多く、不当な説明率上昇を考慮した自由度調整済み R^2 をもとに考察すべきところかもしれないが、表2と表3に見られるように、 R^2 との違いは僅かなものであるため、 R^2 をもとにして考察を行う。

6. 考察

ここでは、5節で示した実験結果をもとに考察

を行う。なお、前節でも述べたが、表1に見られるように、独立変数間に相関が認められ、特定の独立変数のみが他の変数と無関係に変動するという仮定が成り立たないことが示された。豊田(1998)によると、「標準偏回帰係数は『当該予測変数以外の予測変数の値を一定にしたという条件下で、当該予測変数を1単位動かしたときの基準変数の平均的な変化(変化の期待値)』(豊田, 1998, p.42)」と解釈されるものであるため、ここでは β 値の解釈は行わず、主に R^2 と表1に示された相関関係に注目して考察を行う。本節では、(1) 重回帰分析により算出された R^2 の違いについて、(2) 2つの従属変数それぞれと英語語彙レベルテストスコアの相関について、(3) 2つの従属変数それぞれと英語産出語彙テストスコアの相関について、(4) 2つの従属変数それぞれと英語文法テストスコアの相関について、(5) 2つの従属

変数それぞれと現代国語テストスコアの相関について、(6) 2つの従属変数それぞれと動機強度アンケートスコアの相関について、考察を行う。

(1) R^2 の違い

表1から、文学的英語能力テストとセンター試験のスコアの相関係数は $r=.47$ と比較的強い相関が見られる。これは、Frostの詩が英語で書かれている以上、当然のことと考えられる。

しかし、共通の独立変数による重回帰分析では、両者の R^2 の値に違いが認められた。表2に見られるように、文学的英語能力テストを従属変数とした重回帰分析では、 $R^2=.19$ という結果となった。一方表3から、センター試験のスコアを従属変数とした重回帰分析では、 $R^2=.58$ という結果となった。

独立変数が同じであるにも関わらず、 R^2 にこのような違いが見られたのは、文学的英語能力テストとセンター試験により測定される英語能力の構造が異なるということを暗示しているのかもしれない。しかしながら、表1に見られるように、本実験で用いた変数間に複雑な相関関係が見られることや、調査対象が一高校の高校生であるということから、この主張には慎重にならなければならない。

(2) 従属変数と英語語彙レベルテストの相関

付録3に見られるように英語語彙レベルテストは、単純に単語の意味を学習者に答えさせる問題である。このことを考えると、比較的答えが一義的に決定されるセンター試験のスコアとの間に $r=.66$ という相関が見られたのは当然のことと考えられる。これに対して文学的英語能力テストとの間の相関は $r=.33$ である。これは文学的英語能力テストの設問3に見られるように、文脈や意味の多義性の問題など、単に単語の意味を知っていても、それだけでは文学作品を読み解くことは難しいということ、そして文学的英語能力テスト実施時に辞書の使用が認められたこと、などが関係していると考えられる。

(3) 従属変数と英語産出語彙テストの相関

英語産出語彙テストは、センター試験のスコアとの間には比較的強い相関がみられ($r=.58$)、文学的英語能力テストとの間には弱い相関が見られた($r=.36$)。英単語をどの程度産出できるかは、

センター試験のスコアとは比較的強く相関するようであるが、文学的英語能力テストにおいてはセンター試験ほどは相関が見られないようである。この結果は、英語語彙レベルテストの場合と同様に、文学的英語能力テスト時に学習者の辞書使用が認められたことが関係していると考えられるが、このことに加えて、文学的英語能力と一般的英語能力の構造の違いを反映したものであるかもしれない。ただし、 R^2 の考察の部分で述べたように、この主張の断定は今後の研究を待たねばならない。

(4) 従属変数と英語文法テストの相関

英語文法テストは文学的英語能力テストとは $r=.36$ という相関を示し、センター試験のスコアとは $r=.58$ という相関を示した。文学的英語能力テストの設問1に見られるように、韻文においては音韻構造の関係から、しばしば文法規則が破られることがある。つまり、センター試験では非文として扱われるようなものが、文学作品では容認されるということがあるのである。したがって、文法に対するこの違いが相関係数の違いを引き起こした1つの要因に挙げられよう。

(5) 従属変数と現代国語テストの相関

現代国語テストは、文学的英語能力テストのスコア、センター試験のスコアとの間にそれぞれ $r=.20$, $r=.32$ と弱い相関が示された。言語閾値仮説によると、学習者は外国語においてある一定のレベルに達するまでは、第1言語のリーディング能力を外国語のリーディングで活用することはできないと考えられている。本研究で示された相関係数をみる限り、学習者は第1言語でのリーディング能力を英語のリーディングに活用できるレベルには達していなかったようである。

(6) 従属変数と動機強度アンケートの相関

表1から、文学的英語能力テストと動機強度アンケートの間の相関が $r=.14$ とほとんど相関が認められない。英語は好きでも文学作品は苦手であるという学生や、英語は全体的にはあまり好きではないが、文学作品を読むことに関しては好きであるという学生などがいるということも考えると、文学作品を読み解く能力と英語を学習したいという動機はあまり関係がないのかもしれない。ただし、表1において、センター試験のスコアと動機

強度アンケートの間にも弱い相関係数 ($r=.27$) しか認められていないということを指摘しておかなければならない。

以上、ここまで考察してきた上で、今回の調査では研究課題 (i) に関しては、現場の教師や学習者にとって身近で直観的に英語能力に関わっていると考えられる変数では、学習者の文学的英語能力テストのスコアを十分に説明、または予測することができないという結果になった。また、(ii) については、文学的英語能力テストとセンター試験のスコアの説明率が大きく異なったという結果となった。

7. 結論と今後の課題

本研究で示されたことは、(1) 現場の教師や学習者にとって身近で、英語学習に関係していると直観的に感じられる変数では、文学的英語能力テストのスコアをあまり説明、予測できなかったこと、(2) 独立変数は同じであったにも関わらず、文学的英語能力テストのスコアが説明される割合は、センター試験のスコアが説明される割合に比べてかなり小さなものであったこと、(3) 相関係数のパターンが、文学的英語能力テストのスコアとセンター試験のスコアでは異なり、文学的英語能力と一般的英語能力の構造の違いが反映されている可能性があること、の3点である。

ただし、(1) について、文学作品が英語で書かれている以上、その説明率は低かったとは言え、学習者が英語で文学作品を読む際には、今回用いた独立変数は、その読解にとって必要不可欠な要素であるということを心に留めておかなければならない。また、(3) について、本研究は日本のある一高校に対して試験的に行ったものであり、今後他の学校などで同じ実験が繰り返され、交差妥当化がなされるまでは、これを最終的な結論とすることに対しては慎重にならなければならない。また、文学的英語能力テスト実施時の学習者の辞書使用も、相関関係に影響を及ぼしていると考えられ、(3) の明確な議論は今後の研究に委ねられよう。

今後の課題としては第1に、文学的英語能力の構成概念の妥当化を進めていく必要がある。本研

究では、Robert Frost の詩を学習者に読ませ、その内容についての質問に解答させることで得られた得点を文学的英語能力の指標とした。しかし、文学には今回用いたテストでは十分に扱われていない、自由間接話法やメトニミーといった多くの特性がまだ存在する。したがって、例えば Campbell and Fiske (1959) による多特性-多方法の行列などを使うことで、文学的英語能力の構成概念妥当化をはかっていくことが必要であろう。

第2に文学的英語能力をより強く予測、説明する変数を発見することが挙げられる。こうすることで、文学的英語能力と一般的な英語能力の違いが記述され、両者の違いが明らかにされるであろう。

第3に、同様な実験が他の様々な環境で繰り返される必要がある。また、英語学力のより高い学習者を被験者として同じ実験を繰り返せば、Fecteau (1999) との比較検討が可能になり、英語教育における文学教材の活用をより深く議論することができよう。

第4に、文学的英語能力と一般的な英語能力という2つの構成概念の関係が明らかにされなければならない。本研究では、教師と学習者にとって比較的身近なものを独立変数として投入し、それぞれの R^2 に違いがあったということが示されたに過ぎない。しかし、そもそも2つの従属変数はどのような関係になっているのかということについては構成概念のレベルで明らかになっていない。

日本の英語教育において文学教材についての実証的な研究はまだ始まったばかりであり、今後様々な観点から研究されていく必要がある。このような試みがなされることで、英語教育において文学教材を用いるとはどういうことか、文学教材を英語教育から排除することが何を意味するか、ということを深く理解した上で、英語教育において文学教材をどのように取り入れていくべきかが実証的に議論できるのである。

引用文献

- 豊田秀樹. (1998). 『共分散構造分析 [入門編] - 構造方程式モデリング』. 朝倉書店.
- Brumfit, C. J. and Carter, R. A. (1986). English literature and English language. In Brumfit, C. J. and

- Carter, R. A. (Eds.). *Literature and language teaching*. (pp.2-21). Oxford: Oxford University Press.
- Campbell, D. and Fiske, D. (1959). Convergent and discriminant validation by the multitrait-multimethod matrix. *Psychological Bulletin*, 56 (2), 81-105.
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Culler, J. (1975). *Structuralist poetics: Structuralism, linguistics and the study of literature*. New York: Cornell University Press.
- Davis, J. (1989). *The act of reading in the foreign language: Pedagogical implications of Iser's reader-response theory*. *The Modern Language Journal*, 73 (4), 420-428.
- Fecteau, M. (1999). First- and Second-language reading comprehension of literary texts. *The Modern Language Journal*, 83 (4), 475-493.
- Gardner, R. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. London: Edward Arnold.
- Hoffstaedter, P. (1987). Poetic text processing and its empirical investigation. *Poetics*, 16 (1), 75-91.
- Isenberg, N. (1990). Literary competence: The EFL reader and the role of the teacher. *English Language Teaching Journal*, 44 (3), 181-190.
- Nation, I. S. P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schauber, E. and Spolsky, E. (1986). *The bounds of interpretation: Linguistic theory and literary text*. Stanford: Stanford University Press.

An Experimental Study on High School Students' Literary English Competence

by

Osamu HAMAGUCHI

Graduate School of Education, Hiroshima University

Yoshito NAKAMURA

Graduate School of Education, Hiroshima University

Akira ONO

Graduate School of Education, Hiroshima University

Toshiaki OZASA

Graduate School of Education, Hiroshima University

Takayuki NISHIHARA

Student at Graduate School of Education, Hiroshima University

In recent English language teaching in Japan, which tends to emphasize practicality, there have been claims that literature is of no use. In accordance with this, textbooks seem to have few literary texts. There is, however, no empirical evidence justifying this situation. In order to consider whether this current situation is appropriate or not, models of literary English competence and general English competence, and the differences between them, need to be described. As a first step towards this, in the present study, multiple regression analyses were conducted by regarding the scores of a literary English competence test and the Center Test as the dependent variables, and those of five tests (English vocabulary level test, English productive vocabulary test, English grammar test, contemporary Japanese test, and questionnaire for motivation to study English) as independent variables. The results showed a significant difference between the R^2 values. Discussions based on R^2 's and correlation coefficients between variables are presented as one piece of empirical evidence for the consideration of the utility of literature in ELT from now on.

付録1：文学的英語能力テスト

次は米国の詩人 R. フロストの「雪降る夕べ森かげに馬を止めて」という詩です。これを読み、以下の設問に答えなさい。辞書は自由に使ってください。(英文の右側にある数字は行数を示します。)

Whose woods these are I think I know.
His house is in the village, (A);
He will not see me stopping here
To watch his woods fill up with snow.

My little horse must think it queer 5
To stop without a farmhouse near
Between the woods and frozen lake
The darkest evening of the year.

He gives his harness bells a shake
To ask if there is some mistake. 10
The only other sound's the sweep
Of easy wind and downy (B).

The woods are lovely, dark, and deep,
But I have promises to keep,
And miles to go before I sleep. 15
And miles to go before I sleep.

- 設問 1. ① 1 行目の英文を普通の語順にしなさい。② ところで、なぜこのような語順になっていると思いますか。日本語で答えなさい。
- 設問 2. 2 行目の (A) には、もともと次のどれがあったのでしょうか。
away, though, far, too, there
- 設問 3. 5 行目の 'little' には、馬に対する 'I' のどのような気持ちが込められているのでしょうか。日本語で答えなさい。ただし、「小さい」という意味ではありません。
- 設問 4. 5 行目の 'it' は何を指していますか。その内容を日本語で答えなさい。
- 設問 5. 10 行目の 'to ask if there is some mistake' について、仮に some を any にかえて 'to ask if there is any mistake' とした場合、どのような意味上の相違が生じますか。日本語で答えなさい。
- 設問 6. ① 12 行目の (B) には、もともと flake と flakes のうちどれがあったのでしょうか。② また、それを選んだのはなぜですか。日本語で答えなさい。
- 設問 7. 11 行目と 12 行目から感じとられるものが、芭蕉の「古池やかわず飛び込む水の音」にも共通してあります。それが何か、日本語で答えなさい。
- 設問 8. 15 行目と 16 行目に繰り返されている 'before I sleep' において、sleep は究極的には何を暗示していますか。英語 1 語で示しなさい。

付録2：文学的英語能力テストの解答

- 設問1 ① I think I know whose woods these are. [5] ② (4行目の終わり (snow) と) 韻を踏ませるため [5]
- 設問2 though [5]
- 設問3 2つの意味が考えられる, (1) 1つ目は, 「かわいらしくて, 愛しい」という意味。T は馬のことを可愛がっていることが分かる (2) 2つ目は「愚かな」という意味。T は, 周りの状況を把握できない馬を哀れんでいる。[10×2]
- 設問4 近くに農家もないのに, 止まるなんて。/ しかも, あたりには木々が生い茂り, 湖も凍てつき, /さらには1年中でもっとも暗い夜なのに。/ (to 以下の部分 (6~8行目にあたる部分))。[5×3: 6~8行目の内, 1行分 (つまり1スラッシュ分) を5点とした]
- 設問5 any だと, 間違い (mistake) があるのかどうか, 不確かとなる。それに対し, some の場合は, 間違い (mistake) があるのが前提となる。[8+7: any に関して8点, some に関して7点]
- 設問6 ① flake [5] ② (9行目の終わり (shake) と10行目の終わり (mistake) とともに) 韻を踏んでいるから。[5]
- 設問7 静寂, 静けさ, など [10]
- 設問8 die (death) [15] ([] 内は配点を表す)

付録3：英語語彙レベルテスト

1~6の単語の中から各文が指し示す意味の単語を一つ選び, 記号を記入する問題です。

- 【例】 1 business
2 clock
3 horse
4 pencil _____ part of a house
5 shoe _____ animal with four legs
6 wall _____ something used for writing

付録4：英語産出語彙テスト

下線部に適切な単語を一つ書く問題です。単語の最初の音節はすでに書いてありますので, それを手がかりにして考えてください。

- 【例】 Ann intro _____ her boyfriend to her mother.

付録5：英語文法テスト

二人の短い対話文の中の下線部に当てはまる単語を選択肢の中から一つだけ選び, 記号を記入する問題です。問題は35問からなっています。

- 【例】 “How old is George?”
“He’s two years younger _____ his brother Paul.”
(A) that (B) of (C) as (D) than

付録6：動機強度アンケート

この質問は, 各設問の答えとして当てはまるもの一つを選び, 記号を記入していただくというものです。

- 【例】 1. 英語の授業で学習した内容について自らすすんで考えることがありますか?
a) 大変よくある。 b) ほとんどない。 c) 時々ある。 _____